



## 石鹸と言葉

「アイヴォリーソープ (Ivory soap) ってあるでしょう？ 私はあの特種な臭いが大嫌いなよ。アイヴォリーと聞いただけで吐き気がするわ」とネイティヴ・アメリカン (以下 NA) のワラパイ族の友人 (50代) が言う。それは、小学校時代に、インディアン管理局 (Bureau of Indian Affairs, 略 BIA) によって強制的に全寮制の学校に入れられたときの経験からだ。それらの政府直轄の学校では、子どもたちは自分の母語を話すことを禁じられ、伝統的な長髪を刈られ、白人のシャツ、スカートやズボン、靴をはかされた。一言でも母語を話せば、ものさしで手をひっぱたかれ、アイヴォリーの石鹸で口の中をうがいすることで、「汚い言葉」を洗い流させられた。NA の人々の歴史の一コマである。

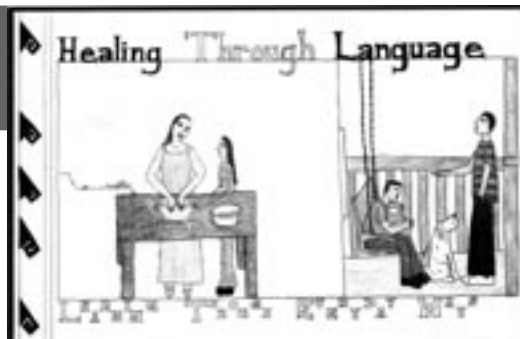
インディアン管理局局長 J.D.K. Atkins は、1887 年に次のような英語中心の発想を公言した：

「…真のアメリカ人であるならば、我が国の憲法、法律、そして制度が他のどの国のそれよりも優れていることを知っており、これらは我が国の言葉、すなわち英語を通して初めて国民全般に根強く行き渡ることを周知しているはずだ。…無数の民族と人種の間で共同意識、一体感を確立するには、まず 1 つの同じ言葉を話すということがあって初めて可能になる」

そして Atkins は、次のように結論する：

山本 昭 Yamamoto Akira (カンザス大学教授)

山本文子 Yamamoto Fumiko (カンザス大学名誉教授)



Artist: Diana Ortiz (age 14), Santo Domingo Pueblo, New Mexico, USA©2002  
Courtesy of Indigenous Language Institute

「インディアンの教育には彼らの言葉は有害無益であり、文明化の目的にはまさに危険といってよい。したがって保留地内の学校では、英語以外の言語を使うことは許されない」

アメリカ先住民の言語に対するこのような否定的な態度は、法律化こそされなかったが、一般国民の間に根深く不文律として存在している。そして、石鹸の臭いが身体にまつわりつくように、自分たちの言語への否定的な思いが NA の人々の生理、精神に絡みついているが、それから抜け出そうとしている人たちが増えてきている。この外的、内的な反言語の態度と闘いながら、自分たちの言語を守り、促進させようとしている NA のため、遅まきながら 1990 年 10 月、前ブッシュ大統領の署名で、先住民の言語がアメリカ史上初めて生きた言語として認められた。“Native American Languages Act” (Public Law 101-477) がそれである。今回は、その意味と、NA の人たちが努力していることについて述べよう。

表紙写真  
について

## Old Etonians

根岸 雅史 Negishi Masashi (東京外国語大学教授)

この写真は、英国の名門パブリック・スクール、イートン校 (Eton College) にて撮られたものである。英国には数多くの伝統校があるが、中でもイートン校は 1440 年の創立であり、500 年を超える歴史は際立っている。

その歴史と伝統ゆえ、イートン校には、錚々たる卒業生がいるわけだが、その卒業生を Old Etonians (略して、OEs) と呼んでいる。この Old Etonians には、歴代総理大臣が 19 名、また、作家には *Animal Farm* でおなじみの George Orwell、経済

学者の John Maynard Keynes など、枚挙にいとまがない。

この写真の胸像の主は、その Old Etonians のひとりで、英国ロマン派の詩人である Percy Bysshe Shelley (1792-1822) である。胸像の下の木の部分には、何か文字が彫ってあるのが見える。この文字についてイートン校に問い合わせたところ、以前には、学生が自分の名前をパネルに彫る伝統があり、これもそのひとつであるとのことであった。実は、イートンにはこのほかにも

うひとつ Shelley の胸像があるが、こちらは公開されていない。

イートンは町の名前でもあり、これは女王陛下のお城のある町ウインザーのとなり町である。ウインザー城に行った折にでも、少し足を延ばして、この伝統校を訪ねてみてはどうだろうか。ウインザーからイートンに行くには、テムズ川にかかる小さな橋を渡る必要があるが、そのあたりでアフタヌーン・ティーをしてもよい。

